

在日外国人の
ラジオ番組作り支援

吉富志津代さん(55)

阪神大震災の被災地で、多言語コミュニティーラジオの放送や生活情報の翻訳・通訳を通して在日外国人を支えてきた吉富志津代さん(55)が、宮城県気仙沼市でフィリピン出身女性のラジオ番組作りを手伝っている。日本語が不自由な外国人は地域社会で孤立しがちだ。「誰も排除されない社会にしたい」と話す吉富さんは、神戸で培った経験を東日本の被災地に伝えている。

吉富さんは阪神大震災前から在日外国人の生活支援をしていた。震災後は避難生活を手助けしようと多言語コミュニティーラジオ局「FMわいわい」の開設に携わった。複数の言語で生活情報を流し、外国人のコミュニケーション作りを支えた。現在も、ベトナム語や韓国語など10言語で情報を

伝えている。99年には「ミニユニティービジネスとして、在日外国人向けに翻訳・通訳するNPO「FAC IL(ファシル)」も設立した。

東日本大震災直後から、被災地の在日外国人支援をしたいと考え、昨年4月下旬、フィリピン人らの団体に母語・タガログ語のラジオ番組作りを提案した。団体のメンバーである伊藤チャリトさん(37)らの日本語は片言程度。震災後、思いを分かち合える人が周囲に少なかった。吉富さんの提案に「被災体験を自分の言葉で伝えられるかも」と番組作りに乗り出した。

6月下旬、伊藤さんの自宅にフィリピン人女性ら計6人が集まり、初めて番組を作った。震災時の様子や避難所での生活を語った番組を収録。FMわいわいで放送し、インターネットで聴けるようにした。気仙沼

市をはじめ宮城県南三陸町や岩手県花巻市の災害FM

FMわいわいは、在日外国人が地域社会に溶け込むための手助けをしてきた。気仙沼でも、神戸の経験を参

で放送することも決まった。反響も大きかった。
伊藤さんは現在、支援「何のためのラジオ番組作りか考えてみて」。10月、神戸を訪れた伊藤さんらに、吉富さんは聞いかけた。
FMわいわいは、在日外国人が地域社会に溶け込むための手助けをしてきた。気仙沼でも、神戸の経験を参考にしてほしかった。

伊藤さんは現在、支援「何のためのラジオ番組作りか考えてみて」。10月、神戸を訪れた伊藤さんらに、吉富さんは聞いかけた。
FMわいわいは、在日外国人が地域社会に溶け込むための手助けをしてきた。気仙沼でも、神戸の経験を参考にしてほしかった。

兵庫県宝塚市の宝塚大劇場前で、中山光子さん(左端)からチケットを受け取った三沢輝起さん(左から2人目)ら=兵庫県宝塚市で



兵庫県宝塚市の宝塚大劇場前で、中山光子さん(左端)からチケットを受け取った三沢輝起さん(左から2人目)ら=兵庫県宝塚市で

月4日。地元の宝塚NPOセンター長の中山光子さん(51)が宝塚歌公演「オーシャンズ11」のチケット集まつた20人の東日本大震災の被災者に笑顔で手渡した。「夢のある時間を過ごしてくださいね」と声をかけた。宝塚市に妻を残し、仙台市に任中に被災した男性は、「昔はよくに来た。元気を出して、早く日常生活に戻したい」と表情を明るくした。一は被災者がふれあい、気分転換会をつくろうと20人を招待している会員、三沢輝起さん(70)。男性は仙台市のベンチャー企業でいる会員、三沢輝起さん(70)。3月11日、市内の職場で激しい揺れがあった。停電して2日間、懷中電灯で過ごした。原発事故による故